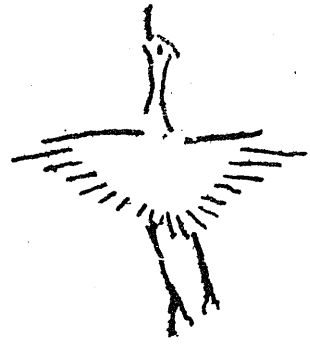

# 我國の保育界

倉橋惣三

保育の充実は、一つに個々の幼稚園、保育所の充実にある。これなくして、我国の幼児の保育の実情は誇れない。しかし、各地方保育会、保育研究会の発達も、保育界の隆昌を示すものであり、また、実際保育の充実を、社会的に基礎づけるものである。その盛になることを、大に希うべきは素よりである。個々施設の充実は、設立主体の熱意と実力と、直接保育に当る人々の熱意と実力とにより、その熱意と実力との集注による。そこに、同志同業の相互の関心と助け合いの実が行われるであろうことも当然であるけれども、先づ自らの責務をゆるがせにしないことが第一義である。而して、この第一義は、自ら省みて限りなく、又、止まるところを知らないのである。而してこの第一義責務を守ることが、狭隘でも自己偏執でもないことは勿論である。たゞ、時に、場所を接して対立感、嫉妬感等が、誤つて潜入する恥しさのあることを、自らに厳戒すべきだけである。苟も天下の保育者として、そんな下等なことがある筈はないし、自らを卑しうすること斯くの如きはないからである。

各保育団体の発達は、同業の認識を明かにし、その発展のための協力を強くすることにおいて、極めて有効有力である。地域的の団結は以前からあつたが、近時、国公立幼稚園保育所の、それ〴〵の団結活動が、盛になつたことは、我国保育界の発達の上に、大に大に喜ぶべきことである。その日々に悩むところ、おのづから別あり、具体の討議、細部の協議、そして、その集団的発言の専と純とにおいて、主張の限界と中心とを鮮明ならしめるに便である。便宜というよりも

必要というべきでもあろう。この意味において、我国の保育界の当然の分化的発達（念の為に言い添えるが、分化（デフェレンシエーション）は、分離（ディスパレーション）とは全く異る事実である）は、大に歓迎すべきでありその実現の遅かつたのを悲しむべきでさえある。分化の発達の欠くべからざる事実であることは、自然界でも、人間社会においても至当の法則である。たゞ、分化と分離、分化的と乖離的とを混同することは、この法則の誤解であり、屢々明識の混乱であり、知性の幼稚でさえある。而して、分化には矛盾も衝突も伴わないものであるが、分離、分乖（この字の字義は私も実はよく知らないのですが、「似ても似つかぬもの、くらべものにもならぬもの、即ち全然異るというこゝろを含むようです。決してそういう心を含まない分化と異る点を強めるために、わざと日常使わない漢字を用いました。分化の迎うべきで、分離の避くべきことを強調しているのです。分離には争いが起つても、分化には争いの起る筈のことでありません。不同の点があつても、一つになれないものではありません。むしろ、その負う任務の理解によつて、互に尊重親和しあえるものです。）

その親和、従つて慰め合いのために、更に日本の幼児保育のためという共同意識のために、分化的集団が、日本の幼児教育者の大同団結を欲するのは、更に自然の進展である。そこに、全国保育連合会の存在のこゝろがあり、既に六回の全国大会を、公私幼稚園、保育所の差別なき合同によつて催された事績がある。たゞ、近来、各分化団体の成立と共に（？）その各々の集会に急にして、全保連に対するこゝろのおのづから疎になる風がないといえないのは甚だ遺憾である。大同が、小同の何んの障りなろうや、大同が小同の何んの妨げになろうや、若し、万一にも、相容れないようなことがあるならば——、日本の保育者が小同でなければ話しあえないとすれば、——同志のことに関心をもたず、同業のために計る心の広さも持たないとすれば、遂には我国の保育界は分離せられるのである。日本の幼児が幼児として相容れない心に扱われるのである。悲しいこと此の上もない。

保育の学的研究に至つては、保育原理の探究として、個々の施設、各保育団体に通じて、或は客観の批判的準拠を求め或は、保育共通の一般的通則を探り、当面の対象というよりも、普遍の保育理念を、学の理想的精神において思念し、提示し、指導しつゝ、我国の保育の向上と基底を確立することを任とする。この目的によつて、日本保育学会が結成せられ、その第五回大会が、本年五月名古屋市に開かれ、幼稚園保育所の別なく、保育に興味をもつ各学者、同じく幼稚園保育所の別を問わず保育を実際に担当する保育者の真摯なる研究の発表があつた。

本誌本号は、毎大会の例にならい、その記録を編集して、

我国の保育の学的レベルを伝えると共に、その問題の在りかを凝視するの便に供した。大会は前四回に比し、来会者の数も多く会場に溢れ、シンポジュウムその他、各発表に対する討議も盛に、きわめて成功をおさめた。蓋し、松江の第六回全保連大会と共に、本年度我国保育界の二大綜合的行事であつたといえよう。因に、本年の日本保育学会は、名古屋の会友の大いなる尽力によつて此の成功をもたらしたのであり、こゝに、その報告記録を、日本幼稚園協会の本誌に掲載するに際し、その九月全号をこれに当てると共にこの欄を割き、開催地元としての労を、日本保育学会会長として、厚く感謝する機会とする。希くは、来年も亦、各種保育総会の各々盛に開催せられると共に、全国的大会の盛に挙げられんことを。かくして、日本保育の連合体とすべての幼児のためという標語を以て、日本の保育界として『すべての幼児のため』世界の、汎保育大会に参加し、或は主催する日の素地を築きたいものである。